HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヨハネ福音書における代名詞に関する「文学批評」的分析の試み
Author(s)	佐々木, 啓
Citation	北海道大學文學部紀要, 39(1), 83-120
Issue Date	1990-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33564
Type	bulletin (article)
File Information	39(1)_PR83-120.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ヨハネ福音書における代名詞に関する「文学批評」的分析の試み

佐々木　啓

序――方法と問題の所在――

この論文の第一の目的は、ヨハネ福音書テクストにおける代名詞、とりわけ一・二人称名詞（ἐγώ, σύ）、指示代名詞（ἐκεῖνος, οὗτος）、および強意代名詞（αὐτός）をめぐって分析を行ない、それらのこのテクストにおける使用上の特徴を明らかにすることである。次に、このテクストに関して従来歴史的・批判的方法によってなされてきた研究成果に対して、本稿におけるような人称・指示代名詞の分析結果を用いて若干の批判を加えることが第二の目的である。そして最後に、第三の目的として、ここで行なうような分析がこのテクストの独自な解釈に向けてどのように貢献しうるのかを提示したい。加えて、本稿では、これら一連の分析ならびに解釈作業を新約聖書テクストに対する新しい「文学批評（literary criticism）」による研究の実例として位置づける、という方法的試みも同時になされている。

まず始めに、本稿で言う新約聖書に対する新しい「文学批評」とはどのようなものであるのかを、ある程度明確に

しておかなければならない。従来、聖書テクストに対する「文学批評」とは、「文献批判(Literarkritik)」ないしは「資料分析(Quellenanalyse)」に対応するものであり、その実際的作業は「種々の新約諸文書の著者の推定、既存の著作が複合的性格を持つ可能性の推定、特定の文書の背後にある資料の確認とその規模の推定」[1]などを行なうものである。これらの作業は、当然、具体的手順として、テクストの「文体批判(Stilkritik)」や「文学(的)分析(Literar-analyse)」などを含んでいるであろう。D・E・ヒルシュの定義によれば、これらの分析方法は、同一文書内における複数の書き手たちの間の内的関係であれ、同時代の他の文書との外的関係であれ、それらの関係を分析するものであるが、彼はそれらの関係をいずれも「歴史(Geschichte)」という言葉で限定している。[2]つまり、このことからも窺えるように、従来の「文学批評」とは、あくまで歴史的・批判的研究に包括されるものであり、あるいは福音書に関して言えば、様式史や編集史などへと展開して行く分析方法の一環として、理念的にも技術的にもそれらと切り離せないものである。換言すれば、この意味での「文学批評」は当初から通時的分析に従属しているのである。[3]

それに対して、本稿で採用しようとする新しい意味での「文学批評」は、上述した従来の意味での「文学批評」とは以下の点でかなり趣を異にする。すなわち、ごく大雑把に言えば、この新しい意味での「文学批評」とは、最近の文芸・文学理論、言語学理論、さらに言語哲学などの諸成果を考慮した分析方法であると言える。例えば、すでに、H・テュエンはそれらの学問的成果を射程に入れてヨハネ福音書テクストの「文芸学的(literaturwissenschaftlich)」問題を再考すべきことを指摘しているし、[4]R・シュナッケンブルクなどもいわゆる「構造分析」、「テクスト言語学」、「記号論」などと呼ばれるような新しい解釈理論を援用したこのテクストの分析を方法的に位置づけて行くことの必要性を説いている。[5]本稿で用いている方法もこのような研究の趨勢に与するものと考えている。しかし、これらの個

々の理論を検討することは本稿の主題ではない。そこで、ここでは、それらに共通する必要最小限の方法上の観点を要約するにとどめたい。[6]

筆者自身としては、本稿で採用する方法を広義での「構造分析」と考えている。ただし、それは主にフランス語圏で公にされたような、C・レヴィ＝ストロースやA・J・グレマスなどの神話や物語（レシ）に関する分析を模倣したいくぶん職人的技巧を要するいわゆる「構造主義的」分析ではない。[7] 紙幅の都合上ここで「構造」や「構造分析」などの詳細な概念規定を行なうことはできないが、それらの分析の様々な具体例に共通する前提のいくつかを共有するというかぎりで、本稿の方法もまた「構造分析」であると主張したい。[8]

それらの諸前提のうちのまず第一のものは、前述のように、「文献批判」、「資料分析」という従来の意味での「文学批評」にはめられていた「歴史」という限定をひとまず括弧にくくるということである。換言すれば、とりあえず、しかし徹底してテクストをその外部の歴史から遮断された共時的「統一体」として扱うことである。[9] すなわち、「まず文学的な面はそれ自体で（共時的に）考察すべきこと。つまり、文学的生成過程〔の究明〕にとっては不確かなモデル〔つまり共時的考察〕を避けようとして、著作の成立に関する問い（通時的観点）が性急に持ち込まれてはいけない」[10]のである。さらに、第二の前提として、前述のいくつかの理論が明らかにしているように、テクストの持つ様々な意味は、専らとは言わないまでも、ある程度はその（語、文などの）内的諸要素間の有機的関係によって決定される。[11] そこで、これらの点を考慮に入れることによって、ヨハネ福音書テクストに対しても独自な解釈可能性が生じてくるのではないか、というのが本稿の基本的問題意識なのである。

例えば、まさに本稿で取り上げようとする代名詞のようなテクストの要素については、従来の新約聖書研究の枠内

では、新約ギリシア語の問題として旧来の「新約聖書の文法」という側面から説明が試みられるか、[12]あるいは通時的に切り分けられた個々の文書（資料）の文体的特徴として説明されるなど、[13]まさに「歴史」という限定を前提としている。いずれにせよ、代名詞の働きはきわめて「構造的」に決定されるものであることは周知のとおりであり、[14]また、P・リクールのような最近の解釈学理論などでも、「テクストの指示」、「テクスト世界」といった概念をめぐってこのような代名詞が重要な働きをなしていることが主張されている。[15]したがって、テクストにおける代名詞をめぐる問題は、「文献批判」、「資料分析」という意味での従来の「文学批評」と新しい「文学批評」との間の接点にあるとも言えるので、この面からもヨハネ福音書テクストの代名詞を分析する必然性が生じるのである。後で見るように、ヨハネ福音書テクストにおける代名詞のこのような新たな視点からの分析は、このテクストに対する従来の歴史的・批判的方法による研究からは抜け落ちてしまういくつかの問題点をも指摘することになるであろう。

本　論

I　分　析

さて、以下ではヨハネ福音書テクストにおける一・二人称代名詞（ἐγώ, σύ）、（実質的に三人称代名詞として機能している）指示代名詞（ἐκεῖνος, οὗτος）および強意代名詞（αὐτός）についての具体的分析を行なう。ここでは、主に、各代名詞の(男性)単数の諸変化形について、共観福音書テクストに比較しながら、若干の数的・統計的分析を加える。また、その際、それらの代名詞の指示対象としての「イエス」との関係を中心に見て行くことにする。[16]

一、一人称 ἐγώ

まず、一人称代名詞主格の ἐγώ に関して、福音書テクストにおけるそれぞれの使用数はマタイ二十八（二十四）、マルコ十六（二十二）、ルカ二十二（十七）に対して、ヨハネでは百三十二も用いられている。[17] しかも、それらの ἐγώ がイエスによる発言、すなわち「私」＝「イエス」である場合の数と割合は、マタイ十六（十三）、五十七%、マルコ十（十四）、六十三%、ルカ十一（九）、五十%とほぼ近似した値を示しているのに対して、ヨハネでは実に百十七、八十九%にまで達している。そうするとE・シュヴァイツァーのようにヨハネ福音書テクストにおける ἐγὼ εἰμι…という表現の特徴を喧伝する[18]以前に、ἐγώ そのものの使用状況についても、このテクストの文体的特徴として何らかの説明を加える必要があるのではないか。とりわけ、もし、E・ルックシュトゥールの言うように、「模倣を促進することなどないような目立たず重要でないもの」[19]をテクストの文体的特徴と考えるべきならば、なおさらその必要があるであろう。

ところが、奇妙にも、ルックシュトゥール本人を始めテクストの文体分析を詳細に展開するE・シュヴァイツァーやW・ニコル[20]なども、このような観点から ἐγώ そのものをとりあげることはない。もちろん、今示した特徴だけでは、ヨハネ福音書テクストにおける ἐγώ の多用や ἐγώ＝「イエス」の割合の多さといった事実は、たんなる使用数の問題や文法上の「強調」の問題、あるいはいわゆる福音書「記者」の嗜好の問題として説明し尽くされるのではないか、という反論が生じてくるだろう。しかし、以下で示すように、ἐγώ の斜格や他の代名詞のこのテクストにおける使用の特徴を考察した場合、それほど簡単にこの事態を論じ切ることはできない。

次に、ἐγώの斜格を見て行く。属格μοῦについては、各福音書テクストにおける使用数はマタイ八十三（七十）、マルコ四十（五十五）、ルカ八十八（七十）に対して、ヨハネは百二とやはり多い。これらのμοῦが「イエス」である場合の数とその割合は、マタイ四十九（四十一）、五十九％、マルコ十四（十九）、七十五％、ルカ三十六（二十九）、四十一％に対して、ヨハネは七十七、七十八％とやはりどちらも大きい。[21]

次に、与格μοιについて見ると、使用数はマタイ二十九（二十四）、マルコ九（十二）、ルカ二十八（二十二）に対して、ヨハネ三十九であり、同じくそれらが「イエス」を指す場合の数と割合も、マタイ十六（十三）、五十五％、マルコ七（十）、七十八％、ルカ十一（九）、三十九％に対して、ヨハネ三十、七十七％と前の二つの格と同様の傾向を示している。

さらに、対格μεについても、使用数はマタイ三十七（三十一）、マルコ二十七（三十七）、ルカ四十二（三十三）に対して、ヨハネは百であり、同じくそれらが「イエス」を指す場合の数と割合も、マタイ十九（十六）、五十一％、マルコ十八（二十五）、六十七％、ルカ二十四（十九）、五十七％に対してヨハネは九十五、九十五％と他の諸変化形と同じ傾向を示している。

ここまでの数的結果をまとめると、ヨハネ福音書テクストでは一人称代名詞ἐγώの主格のみではなく、斜格もまた多用されていることがとりあえず確認される。しかも、この一人称代名詞が「イエス」による発言、すなわちἐγώ（「私」）＝「イエス」である割合については、特に主格と対格に関しては、共観福音書ではそれが各々五十％～六十七％とある程度近似的値を持っている。つまり、この点に関しては、（共観）「福音書」というジャンルにおけるἐγώの主格、および対格使用上のある種の標準のようなものが予測されるのに対して、ヨハネ福音書テクストは、主格につい

ては八十九%、対格については九十五%とそれから著しく逸脱した値を示していると言ってよいであろう。

ところで、一人称代名詞をめぐるヨハネ福音書テクストにおける使用上の問題はこれだけではない。ἐγώ の斜格には、文法的には普通「強調形」として説明される ἐμοῦ, ἐμοί, ἐμέ という変化形がある。[22] これらの変化形のいずれもまたヨハネに最も多いのであるが、それらが「イエス」を指す割合は ἐμοῦ が全使用数二十四中二十二で九十二%、ἐμοί が同じく二十八中二十六で九十三%、さらに ἐμέ が同じく四十二中四十一で九十八%と、前述 μοῦ, μοί, μέ などよりさらに高い値を示している。[23] したがって、ヨハネ福音書テクストにおいては μοῦ 系列の変化形と ἐμοῦ 系列の変化形との間である種の意味的分節が行なわれているのではないかという推測もできる。すなわち前者を一般的に用い、後者をほぼ専ら「イエス」に限定するという用い方である。この傾向は共観福音書各書にははっきり現われているとは言い難いのだが、ヨハネ福音書テクストではそれが数的に明確である。[24] このような特徴は、ἐμοῦ 系列の変化形をたんに「強調形」として済ませてしまう従来の文法的説明によっては気づかれ難い事実である。

ἐγώ の複数形 ἡμεῖς およびその変化形についてはここでは詳細に論じないが、ヨハネでは主格の使用数のみが他と比較して多くなっている。[25]

二、二　人　称　σύ

ἐγώ 同様、二人称代名詞主格 σύ についてもヨハネ福音書テクストにおける使用上の特徴は明瞭である。まず、単純な使用数に関しては、共観福音書各テクストでは、マタイ十八（十五）、マルコ十（十四）、ルカ二十六（二十一）に対して、ヨハネでは六十一と、一人称代名詞 ἐγώ ほどではないにせよ、やはり顕著に多いと言える。しかし、それ

らの中で、σύ が「イエス」を指示する場合の数と割合は、マタイ六（五）、三十五%、マルコ五（七）、五十%、ルカ十二（十）、四十四%、ヨハネ三十、四十九%となっており、使用の絶対数ではやはりヨハネが多くなっているが、その全使用数に対する割合は ἐγώ とは異なっていずれのテクストも大差がない。

σύ の斜格に関しては、共観福音書とヨハネのテクストとの間には使用上の顕著な差異が存在しない。また、使用数自体も、例えば、属格 σοῦ などのようにヨハネ福音書テクストにおける使用数が目立って少ないなど ἐγώ の斜格とは異質の特徴がみられる。[26] しかしむしろ、ヨハネ福音書テクストにおける σύ の斜格のこのような使用状況、つまり ἐγώ の斜格と比較した場合の特徴のなさは、次項の三人称の分析と合わせて考えた場合、主格の使用法の特徴を際立たせることになるであろう。なお、この二人称代名詞の複数形に関しては、他に比べてヨハネでやはり主格の使用数が多くなっているのが目立った特徴である。[27]

数的事実やここで示した若干の使用上の特徴を除けば、ἐγώ＝「私」や σύ＝「あなた」という意味でのこれらの代名詞の各変化形のヨハネ福音書テクストにおける使用法それ自体は、旧来の新約文法の中に十分位置づけられる。[28] しかし、次に見るように、三人称の人称代名詞として機能している αὐτός や οὗτος と ἐκεῖνος に関しては、文法的側面からもいくぶん錯綜した問題が提起されるであろう。

三、三　人　称

三・一　αὐτός

たんに「彼」という意味で三人称代名詞男性形として用いられる αὐτός（およびその変化形）は、従来の文法的観

点からするかぎり新約ギリシア語ではむしろ普通の使用法であるとされる。[29] 先に述べたように、事態を明確にするために、こめこでは主に男性単数形について論じる。[30] まず、主格の使用数について見てみよう。その数は、マタイ十二(十)、マルコ十五(二十一)、ルカ四十六(三十七)、ヨハネ十八と、ヨハネにおいてとりたてて多くなっているわけではない。[31] これらの使用例を検討してみると、実際、共観福音書テクストにおいては、αὐτός は、「……自身」という意味でのいわゆる「強意代名詞」としての機能を失い、ほぼ専らたんなる三人称代名詞として機能している。[32]

ところが、ヨハネ福音書テクストについては、この傾向が当てはまらない。なぜなら、私見によれば、このテクストでは第二章二四節を始めとして、共観福音書テクストとは異なって αὐτός をほぼ専ら「強意代名詞」として用いている可能性が大きいからである。[33] ここでもまた、一人称斜格の強調形(ἐμοῦ 系列の諸変化形)と同様に、ヨハネ福音書テクストにおける代名詞使用上のある種の配慮、つまり以下で言及する ἐκεῖνος や οὗτος の主格使用との間に設けられたある種の分節化が感じられよう。さらに、この特徴が顕著に現われているのは主格においてのみであるという興味深い事実にも注意が必要である。この αὐτός を専ら「強意代名詞」として用いる傾向は、ヨハネ福音書テクストにおいても、他の変化形(斜格)には見られない特徴なのである。また、それらの斜格には、共観福音書テクストに比べても、際立った特徴が見られない。[34]

ただし、これらの事実は、後述するような、実質的に三人称代名詞として機能している ἐκεῖνος や οὗτος の分析結果と合わせて検討されるべきである。

三・二　ἐκεῖνος

ἐκεῖνος の諸変化形に関して見ると、共観福音書テクストにおいてはそのほとんどが、ἐν ἐκείνῳ τῷ καιρῷ のように限定的(attributive)に用いられており、意味としては、文脈に応じて「その……」とか「この……」と翻訳されることになる。[35] それに対して、ヨハネ福音書テクストでは ἐκεῖνος の諸変化形を「彼」などと実詞的(substantive)に訳さなければならない場合の割合が、その男性単数諸変化形全使用数五十二中四十六、八十八%と圧倒的に多くなっている。さらに、ἐκεῖνος（およびその男性単数諸変化形）の使用数そのものをとってみてもマタイ十七（十四）、マルコ四（五）、ルカ十二（十）なので、ヨハネはかなり多くなっていると言える。[36]

前項で予告したように、ἐκεῖνος の諸変化形に関してはいくつかの使用上の特徴が見られる。まず、前述のように共観福音書テクストで ἐκεῖνος の男性単数諸変化形が実詞的に用いられる例はほんの数例しかなく、[37] しかもそれらの ἐκεῖνος の諸変化形が「イエス」を指示する場合はまったくない。つまり、それらの場合、主として ἐκεῖνος の諸変化形は、「イエス」によって何者または、何事かが指示されるときに用いられているのである。ところが、ヨハネ福音書テクストでは十三（主格に限定すれば九）例ほどの ἐκεῖνος が「イエス」を指示している。さらに加えて、ヨハネ福音書テクトスではいわゆる「プロローグ」での間接的言及を除いて物語（ナラティヴ）の語り手によって「イエス」が ἐκεῖνος で指示されることはない、という特徴もある。共観福音書テクストとヨハネ福音書テクストの間に見られるこれらの ἐκεῖνος 諸変化形使用上の差異は、テクストにおける三人称代名詞に相当する指示代名詞や αὐτός 使用に際して何らかの語用上の分節化がなされていることを示唆するかもしれない。[38]

ところで、ヨハネ福音書テクストにおける ἐκεῖνος の実詞的使用というこの特徴については、文法学者や文体分析を行なう学者たちも以前から指摘しているが、[39] N・ターナーなどはヨハネ福音書テクストの用法を新約ギリシア語の標準からしては例外的なものとして処理しようとしているように見える。[40] しかし、このように ἐκεῖνος が実詞的に使用されていたり、あるいは前項で指摘したように αὐτός がいわゆる「強意代名詞」として使用されていたりする事実を考慮すれば、ヨハネ福音書テクストのギリシア語を「文学的ではない」とか、「セム語的だ」などとする従来の歴史(通時)的・文法的見方[41]だけでは説明し切れない新たな問題が提起されることになるであろう。

この ἐκεῖνος の実詞的使用は、E・シュヴァイツァーの三十三個のヨハネ福音書における文体的特徴以来、ヨハネ福音書テクストの文体的特徴の中に加えられてきた。[42] また、R・ブルトマンなどは、このテクストの ἐκεῖνος を福音書「記者」の文体として位置づけ、それを「強調」としてとらえている。[43] しかし、今述べてきたような視点、あるいはヨハネ福音書テクストにおける諸々の代名詞そのものの使用の特徴を見通す視点からこの問題が論じられてはいない。[44]

ここでもやはり、αὐτός の場合と同様、ἐκεῖνος の斜格の用法に特徴はなく、したがって、主格の使用上の特徴が際立つことになる。[45]

三・三　οὗτος

οὗτος の主格の実詞的使用は新約ギリシア語を通して一般的用法である。[46] ところが、そのような使用例の数はマタイでは三十(二十五)、マルコでは十(十四)、ルカでは三十(二十四)であるのに対して、ヨハネでは三十九とやはりヨハネ福音書テクストにおいて最も多くなっている。限定的用法も含めた οὗτος の主格全体の使用数も、マタイ三十

二（二十五）、マルコ十二（十五）、ルカ三十九（三十）に対してヨハネは四十九とやはり多くなっている。[47]

さらに、上記の実詞的用法の οὗτος が「イエス」を指示する場合の絶対数は、マタイ十五（十三）、マルコ六（八）、ルカ十四（十一）に対して、ヨハネは二十四とやはり多い。[48]

οὗτος のその他の男性単数諸変化形について見てみると、その使用数、および実詞的使用の数についてはヨハネがやはりやや多いと言える。[49]

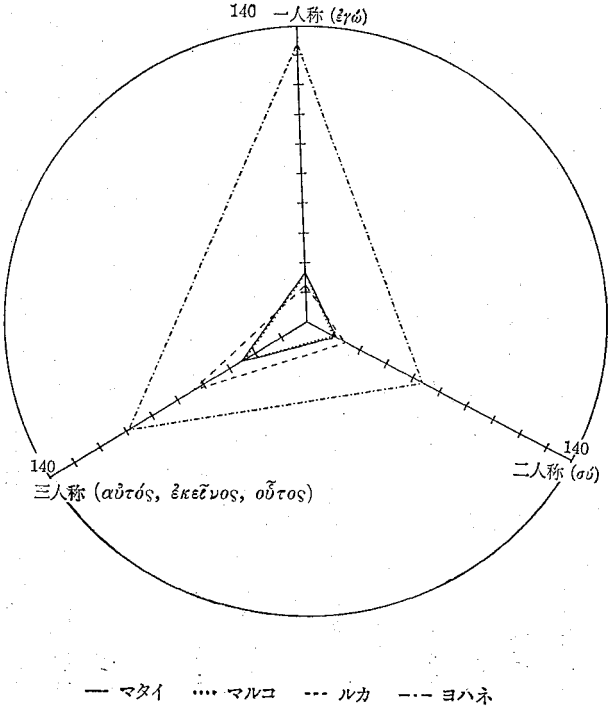
ここで、ヨハネ福音書テクストにおいて三人称代名詞として使用されている αὐτός, ἐκεῖνος, οὗτος の三つの男性単数諸変化形を合わせて考察した場合の一般的特徴について言及しておく必要があるであろう。そもそも、これら三つの代名詞の実質的使用数が多いのは、マルコ、ヨハネ、ルカ、マタイの順であるが、[50]実詞的に男性単数主格として、すなわち「彼」などとしてこれらの代名詞が使用されている場合の数は、マタイ四十二（三十五）、マルコ二十五（三十四）、ルカ七十八（六十二）、それに対してヨハネは九十七とかなり多くなっている。[51]さらに、そのうち指示対象が「イエス」であるものは、マタイ二十一（十八）、マルコ十三（十八）、ルカ四十三（三十四）に対してヨハネは四十四とやはり多くなっている。[52]

ただし、これら三つの代名詞の主格以外の他の諸変化形使用に関しては、各々先に指摘したような若干の特徴を除いて、ヨハネ福音書テクストが他の福音書テクストに比べて使用数・使用法において一貫した相違を持っているとは言い難いことにも言及しておかなければならない。[53]

最後に、これまでのIにおける分析に関して一応のまとめを呈示しておきたい。

まず、ヨハネ福音書テクストにおける人称代名詞、および（実質的に三人称代名詞男性形として機能している）指示代名詞などの使用上の特徴は、なによりもその数的事実から確認される。すなわち、ヨハネ福音書テクストにおける各代名詞の相対的多用は上記の分析によっても明らかであるが、[54] 取り分け注目すべきなのは、このテクストにおける各人称代名詞、および（実質的に三人称代名詞男性形として機能している）指示代名詞などの単数主格の実詞的用法の多用である（図1参照）。[55] また、それらの指示対象の「イエス」への集中は、絶対数としてはやはりヨハネ福音書テクストに最も多いことが確認される。このような単純なテクストの特徴も――あるいは単純な特徴であるがゆえに――、歴史的・批判的観点からなる

図1　四福音書における各人称代名詞、および（実質的に三人称代名詞男性形として機能している）指示代名詞、αὐτός の単数主格の（各福音書の長さに応じて調整した）数。



従来の「文学批評」においては看過されてきた。というのも、従来の「文学批評」はその基本的前提として、テクストを現にあるがままの統一体として把握することを最初から排除しているからである。[56] そのため、このような文法的には瑣末な要素に関するテクストのマクロ的視点からの分析は、資料問題を中心にした歴史的・批判的方法に基づく通時的「文学批評」には馴染まなかったと言えよう。

さらにまた、例えば ἐγὼ εἰμι…など従来神学的に重要視されてきた一部の表現が、対象としてのテクストそのものの分析までもある程度動機づけてきたことも考えられる。それによって、代名詞の使用上の特徴を本稿のようにテクストの構造的特徴として統一的に把握する試みがいっそう妨げられてきたのではないだろうか。[57]

しかし、ヨハネ福音書テクストにおける個々の代名詞使用上のいくつかの質的特徴、例えば、一人称の ἐμοῦ 系列の特定化された使用、他の新約テクストのギリシア語の標準からは外れる αὐτός の「強意代名詞」としての使用、「イエス」を指示するために実詞的 ἐκεῖνος を語り手が使用しないことなどは、それらが意図されたものか否かにかかわらず、テクストにおける代名詞使用上のある種の分節を感じさせる。本稿の分析方法における基本姿勢は、このような分節を、歴史的・批判的方法の枠内にある「文学批評」によって「資料」や「記者」、「編集者」によるものと結論づけるのではなく、誤解を恐れずに言えば「テクストの事実」[58]とでもいうべき方向においてとらえて行こうとするのである。

共観福音書テクストにおいては、上記のような人称・指示代名詞などの使用上の諸特徴は見られず、当該の問題について共通の傾向しか見出せない。そうすると、ヨハネ福音書テクストにおける人称・指示代名詞などの使用上の特徴は、たんなる文法の問題、あるいは「資料」や「伝承」の問題として通時的に処理される以前に、最終的には福音

書という文書の文学的性格そのもの（例えば、「ジャンル」など）の問題とも関連してくるようなテクストのごく基本的な「文学批評」上の問題、換言すれば文学的構造の問題として再考される必要があるのではないだろうか。

II　歴史的・批判的研究への問題提起

ここでは、ヨハネ福音書に対して従来の歴史的・批判的観点からなされたあるひとつの研究成果との関連の中で、Iで示したような分析結果が提起する問題点を指摘しておきたい。

従来の研究を顧みると、この福音書に関する立ち入った神学的議論を始めるに先だって、あるいはそれに即応してまず問題となるのは、テクストの歴史的背景であり、それを明らかにしようとする分析を方法的に具体化したものの一つが「資料問題（分析）」である。言うまでもなく、「本文批判（Textkritik）」を経た後、歴史的・批判的観点からするこの「資料問題（分析）」への第一のアプローチは「文学批評（Literarkritik）」である。しかし、ここでいう「文学批評」とは、「序」で指摘したように、何らかのかたちでまさに「歴史」という限定を加えられたものである。本稿で試みる探求の一つの側面、その消極的側面は、そのような方法的基盤に立ったヨハネ福音書テクストの「資料問題（分析）」に対して、Iで行なったような分析結果によって、つまり新しい「文学批評」的観点から一定の批判を加えようというものである。

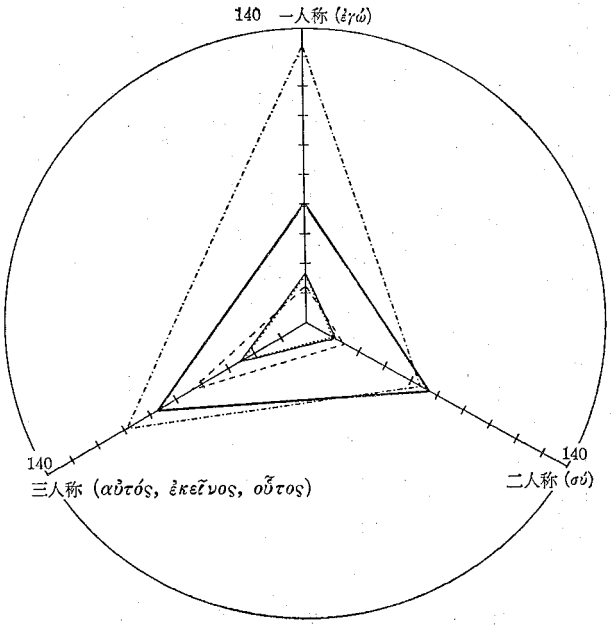
さて、ヨハネ福音書に関して現在最も存在が有力視されている「資料」は「しるし資料」である。[59] ここでは、それを、イエスの受難に関する「資料」と結合された「しるしの福音書」という文書資料として現在ある福音書テクストから再構成しようとするR・T・フォートナの「資料」仮説を取り上げて批判してみたい。そうするのは、彼の仮説

がまさに文書資料を厳密に逐語的に確定しようとする試みの最も極端な例だからである。[60] 繰り返しになるが、そもそも本稿の目的の一つは、そのような探求の現実的・方法的不可能性を示唆することである。[61]

実際、本稿で取り扱った代名詞のようなテクストの瑣末な要素でさえも、あるいは瑣末な要素であるがゆえに、[62] フォートナなどのいわゆる「資料」仮説に対して十分反証を提出しうるのである。ここでは、そのような反証の中でも最も明確なものを示しておきたい。

結論を先取りすれば、まず第一に、各人称・指示代名詞などの使用状況に関しては、フォートナの再構

図2 四福音書および「しるしの福音書」における各人称代名詞、および（実質的に三人称代名詞男性形として機能している）指示代名詞、αὐτός の単数主格の（各福音書の長さに応じて調整した）数。



— マタイ　···· マルコ　--- ルカ　-·-·- ヨハネ　━ しるしの福音書

成した「しるしの福音書」も現在のヨハネ福音書テクストと同じような特徴を示しているのである。つまり、彼の「しるしの福音書」の文書資料としての独立性に対して、この点では疑問が生じるということである。例えば、Ｉで確認したヨハネ福音書テクストにおける人称・指示代名詞などの使用上のもっとも基本的な特徴、すなわち、主格の多用という事実が、フォートナの再構成した「しるしの福音書」[63]にも見られるのである（図２参照）。[64]

ἐγώ が「しるしの福音書」ではヨハネ福音書テクストに比べて少なくなっているが、それでも共観福音書よりはかなり多いと言える。もっとも ἐγώ が少ないのは、従来の歴史的・批判的研究においてこの語は ἐγώ εἰμι… 表現などと結びついて非常に注目されてきたわけであり、フォートナもこれをことさら神経質に扱っている。[65]また、彼の資料再構成の基本的前提からすれば、そのような ἐγώ 使用表現を多く含むイエスの談話（ディスクール）部分はもともと「しるしの福音書」からは排除されるはずである。しかし、物語（ナラティヴ）（「しるしの福音書」）部分と談話（ディスクール）（現在のヨハネ福音書テクストから「しるしの福音」書を除いた）部分という叙述上の相違があるにもかかわらず、物語（ナラティヴ）部分にも共観福音書に比して ἐγώ 使用がやはり顕著であることにむしろ注目すべきである。逆にいえば、ヨハネ福音書テクストにおいては、この点に関する限り、物語（ナラティヴ）部分と談話（ディスクール）部分両方の基本的・文学的構造に相違がないのではないかという疑問がわくであろう。

ヨハネ福音書テクストと「しるしの福音書」との類似性は、少なくともこの点に関しては顕著だと言える。つまり、この「しるしの福音書」における代名詞使用上の特徴は、共観福音書よりも現在のヨハネ福音書テクストにずっと類似しているのである（再び図２参照）。[66]

問題をさらに細かい点から見てみよう。なるほど、フォートナは慎重にも三人称主格代名詞の実詞的使用に関して

は、ἐκεῖνος を除いて οὗτος のみを彼の「しるしの福音書」に保存できているかに見える。[67] 代名詞の使用状況全体から考察した同じ三人称主格単数代名詞男性形の ἐκεῖνος の実詞的使用の特徴は、Ⅰにおいて先に指摘したとおり、現在のヨハネ福音書テクストには顕著であった。ところが、実際には、これと同じ特徴がフォートナによって再構成された「しるしの福音書」にも見られるのである。[68] この事実は、先に述べた主格代名詞の特徴同様、この「しるしの福音書」が共観福音書よりもヨハネ福音書によく似ていることを示し、この点でもまた、「しるしの福音書」の資料としての独自性を疑問視させることになる。

これらの事実を一体フォートナはどのように説明するのであろうか。「しるしの福音書」と現在のヨハネ福音書テクストとが結果的に文体上の緊密な類似性を示すようになったことをその理由としたりすれば、このような代名詞使用上の特徴などは余りにも基本的なものであるだけに、かえって、ヨハネ福音書テクストにおけるフォートナの「資料」分析の根本的困難を示すことになってしまう。

例えば、これらの代名詞の特徴は、「資料」に対する「記者」なり「編集者」なりの後の手による「付加」的特徴と考えられるであろうか。しかし、代名詞のようなあまりに基本的要素の特徴をそのように説明して「資料」から一貫して排除することなどは原理的に不可能に思われる。あるいは、現在のヨハネ福音書テクストに見られるこれらの特徴はヨハネ福音書の「記者」が「資料」の文体的特徴を模倣した結果だ、という説明がなされるかもしれない。しかし、もしそのような模倣による説明を代名詞の使用のようなテクストの瑣末な要素にまで一般化するならば、それはフォートナ自身が拠って立つ方法上の前提――現在のヨハネ福音書テクストに対して相違を持ったものとして「資料」が導出できるという前提――にやはり重大な疑問を投げかけることになるであろう。[69]

さらにフォートナは、彼の再構成した資料に基づいて、「しるしの福音書」は共観福音書のようなある種の「福音書(a gospel)」であると論じるが、[70]「テクストの事実」はそのような見解をただちに主張することを必ずしも許さない。ヨハネ福音書テクストにおける代名詞使用上のいくつかの特徴は、先に示したとおり、明らかに他の三つの福音書とは異なるからである。「究極的には、福音書とはジャンルの問題ではなく使信の問題である」[71]といったような発言は、テクストの事実を無視して神学的前提を先取りしたものと言わざるをえず、そこでは、本稿で取り上げているような「文学批評」上の問題は依然として解明されていない。

いずれにせよ、なぜ代名詞使用のようなテクストの基本的要素の特殊性が、現在のヨハネ福音書テクストにも、その「資料」であるとされる「しるしの福音書」にも同じく見られるのかは、フォートナのような「資料」仮説ではうまく説明しきれないのである。

このIIの考察では、少なくとも以下の事柄が明らかになる。つまり、フォートナの提唱するようないわゆる「資料」仮説に対しては、本稿で試みたような分析からいくつもの反証を提出しうるのである。[72]まして、フォートナのように正確な、しかも逐語的な「資料」の確定を眼目とする以上、原理的・方法的には、彼はいちいちそれらに整合的な弁明を行なう必要がある。それを行なわずに自ら存在を主張する「資料」から推論を積み重ね、ヨハネの「資料」の思想や「ヨハネ福音書記者」の神学を論じるのは蓋然性の累積にほかならない。[73]

さらに、旧来の「文学批評」の例として、フォートナのような「資料」の分析はただちに「歴史」と結びつけられる。[74]このような方法を採用するかぎり、本稿で取り上げたような共時的あるいはマクロな「テクストの事実」につい

ても「歴史」的（例えば「セミティズム」を仮定するというような文法的）に一貫した説明が必要となるが、上述の分析Ⅰがいくつか示しているように、それは必ずしも容易ではない。そもそも、フォートナのような方法的観点を採用するかぎり、本稿で取り上げた代名詞の諸特徴などは等閑に付されるか見過ごされるかしかないのである。

あるいは、フォートナのように「資料」の厳密な復元を目指すことをしない例えばC・H・ドッドのような説明[75]に対しても、本稿で試みたテクストのマクロな分析は、ある種の疑問を投げかける。つまり、文書資料の有無はともかく、ヨハネ福音書と共観福音書におけるテクスト化以前の伝承経路の相違のような歴史的（通時的）説明よりは、両者の間のかなり根本的な文学的（共時的）差異をさらに立ち入って考察する必要性があるのではないか。[76]それと対応して、従来なされてきたように、伝承史的研究をも含めて、様式史的ないしは編集史的研究方法などの共観福音書の研究方法をヨハネ福音書研究に並行して援用することに対しても疑問が生じてくるであろう。そもそも、様式史にしろ編集史にしろ、そのような分析が可能なのは、まずなによりも共観福音書という文書群が特別な性格をもつためなのである。つまり、それらがまさに「共観」できるということ（これとて実際には同一の傾向的文書群の閉鎖的資料に過ぎないのだが）、文体、思想などの面でお互いに比較対照できるということに基づくのである。細部においてそのような作業すらできないヨハネ福音書テクストにこれらの方法を安易に並行して用いるのは原理的な困難を引き起こす。つまり、ヨハネにおける「資料」探求の過程は、「文体」にしろ「思想」にしろ、「資料」、「記者」、「編集者」などテクスト各層の特徴を探求しながら同時にそれらの特徴を用いて各層を分離する、という循環論証に陥る危険を常に伴っている。[77]この疑問は素朴なものであるが、これを解決しないうちは、フォートナのような「資料仮説」は恣意的である可能性を払拭しえない。

Ⅲ　一つの解釈の試み

最後に、ヨハネ福音書テクストにおける人称・指示代名詞および強意代名詞の使用状況に関して、本稿で行なった分析、すなわち筆者が新しい「文学批評」的観点からのものと考える分析結果に基づいて、最終的にはこのテクストの思想にも関わって来ると考えられる独自の解釈を試みたい。

そもそも、Ⅱで行なったような、従来の歴史的・批判的方法による「資料仮説」に対する反論は、本稿で提示しようとする新しい「文学批評」的分析方法にとってはその消極的側面にしか過ぎない。ここで言う新しい「文学批評」は、「序」でも若干述べたように、積極的な目的として、人称・指示代名詞などの特徴のような純粋な「テクストの事実」を分析・解釈し、それによって釈義に貢献しようとするものである。

本稿における分析で確認しえた最も基本的なヨハネ福音書テクストの事実は、このテクストにおける代名詞の多用、および時としてある種の配慮が感じられるそれらの使用方法である。さらに際立った特徴は、各人称・指示代名詞などの（実詞的）主格が多用されていることと、それらの指示対象が「イエス」である場合が多いことなどであった。さらに、これらの叙述上の文学的・構造的特徴は、共観福音書テクストには見られないものである。

「（人称・指示）代名詞」といういわゆる古典的な文法における呼びかたと並んで、これらの語は、最近の言語学や言語哲学においては「転換詞（shifters）」[78]、「指標詞（indexicals）」[79]などとも呼ばれる。紙幅の都合上、これらをめぐる諸問題の細部に関しては詳述できないが、それらの基本的特徴をもとにヨハネ福音書テクストにおける人称代名詞、（実質的に人称代名詞として機能している）指示代名詞などの使用上の特徴を考察してみたい。

何よりも、「転換詞」、「指標詞」の第一の特質と言えるのは、それらが持つ例えば「メッセージへの関説」[80]あるいは「発話状況への依存性・コンテキストへの可感性」[81]などと呼ばれるものである。つまり、それらは、普通名詞のように、意味（指示対象）が辞書的には一義的に決定されず、それらの意味（指示対象）は発話者や「発話の状況」・「コンテキスト」に依存するということである。換言すれば、「転換詞」、「指標詞」はそれを含む発話内容そのものによって始めて意味が確定される存在なのである。

例えば、発話状況においては、それが時間的・直線的であるがゆえに、この関係は一過的であり、その場にいなかった者たちが後に異なった状況においてそれらの「転換詞」、「指標詞」の意味（指示対象）を正しく把握するためには、最低限、「AがBについてCにむかって『私は彼が……したことをあなたに知らせる』と言った」などと説明的に敷衍しなければならない。この点がまさに、「転換詞」、「指標詞」などとも呼ばれる（人称・指示）代名詞の基本的特徴なのである。また特に、一人称・二人称代名詞に関しては、「それが表示する対象と実存的関係にある」などと言われる。[82]

ところが、この後者の性質は、記述されたテクストにおいては、発話状況における場合と一致する現象としては現われて来ない。発話状況と読書とでは「転換詞」、「指標詞」の機能に微妙な相違が見られると言えるであろう。

例えば、福音書の場合を考えてみよう。現実の歴史的場面において「私は……」とイエスが発言したならば、その「私」はそのように発言している生身のイエスのみを指示する。[83]しかし、テクストに記述された「イエス」が「私」と発言する場合、それはテクストで物語られている――特に、正典としてある種の内的完結性を付与されているような新約聖書の場合は、その書物全体の中で語られている――「イエス」をも指示することになるであろう。[84]つまり、テ

クストにおけるこの人称代名詞「私」は、発話状況における文脈依存性（史的イエスに対する直接的指示）、とテクストの文脈における文脈依存性（史的イエスに対しては間接的指示ないしは非指示）の機能を合わせ持つことになると考えられる。あるいは、両者が一種の偽装関係を持つと言えるかもしれない。[85] したがって、テクストで代名詞によって指示されている人物、例えば「イエス」を史的実在としてのイエスにただちに直接的に結びつけて何かを論じるのは、記述された「転換詞」、「指標詞」などが持つこのようなある種の二重化する機能を用いたテクストの（必ずしも意識的とは言えない）戦略を考慮しないナイーヴな考えと言えるであろう。[86]

ヨハネ福音書テクストにおける人称代名詞の際立った使用法は、一つの可能性として、このような「転換詞」、「指標詞」の機能という側面からも解釈できるのではないか。さらに考察を進めると、例えば、一人称代名詞＝ἐγώ と「イエス」との関係に関して見てみると、ヨハネ福音書テクストでは、長大な談話（第一三章以下）や ἐγώ εἰμι… 表現の多用などによって、一見顕著にイエスが語っているように見えても、実際には、代名詞の多用というもう一つのテクストの特徴によって、それは常に文脈に依存・回帰している。すなわち、そのような場合でも、むしろテクストは潜在的な仕方ではあるが「イエス」を語っている、と言えるのではないか。[87]

以上の例では、専ら一人称代名詞と「イエス」の関係について述べてきたが、「イエス」を指示する二人称・三人称代名詞（さらに、本稿では分析を留保した「イエス」が誰かあるいは何かを指示するのに用いる二人称・三人称代名詞）などについても同種の戦略が潜んでいる可能性がある。[88]

ヨハネ福音書テクストにおける人称代名詞、（実質的に人称代名詞として機能している）指示代名詞などの際立った使用法は、このようなある種の「捩れた直接性」、「偽装された直接性」――逆に「捩れた間接性」、「偽装された間接性」

と言ってもよいであろうが――のようなテクストの独特の機能を読み手に対して発揮しているのではないか。[89] このような「テクストの事実」の純粋に言語的・文学的解釈を進めることによってヨハネ福音書テクストの性格をさらに明確にして行くことができるであろう。[90]

おわりに

本稿で行なったような基本的に統計的分析に基づく解釈は、テクストの個々の文言の解釈には寄与しないという批判がある。[91] しかし、本稿の目的は、まさにそのようなテクストの全体的特徴を明らかにして、それに対して何らかの解釈を試みることであった。そして、そのような試みの方法的基盤を本稿では筆者が新しい「文学批評」と考えるものに求めたのである。そもそも上記のような反論を提起する者は、逆に、テクストの個々の文言の説明から析出されるとするある種の暗黙の（例えば神学的）前提から全てを演繹して、ここで取り上げたようなテクストの全体的特徴を説明しなければならない。しかし、代名詞のような瑣末な要素に対してすら、あるいは瑣末な要素であるがゆえに、それが困難であることを、本稿では折りに触れて述べてきたつもりである。つまり、そのような批判にもかかわらず、本稿の論究が明らかにした「テクストの事実」は依然として残るのである。

最後に、このような新しい「文学批評」的方法と従来の歴史的・批判的研究との相補的関連について述べておきたい。実は、この新しい純粋な「文学批評」的分析は、むしろその純粋さによって従来の歴史的・批判的研究との接点を

持つのである。上述のような分析・解釈結果を積み上げることによって、新約聖書内における諸文書の位置づけの問題（例えば「福音書」というジャンルの特性は何か）や正典成立史上の問題（どのような文学的構造をもった文書が正典化されたのか、同時代の世俗的文書あるいはグノーシス主義的文書などの文学的構造はどのようなものか、それらの相違は何かなど）[92]そして、最後に、ある種の文学的構造と史的イエスとはどの様な関係にあるのかという問題を問うて行くことが可能となる。[93]その場合重要なことは、逆説的ながら、むしろ徹底して文学的・言語的分析に固執することであると思われる。

（注）

（1）W. A. Beardslee, *Literary Criticism of the New Testament* (Philadelphia : Fortress Press, 1970), iii. 土屋博訳『新約聖書と文学批評』ヨルダン社、一九八三年、六頁（D・O・ヴァイア・Jrによる「編者まえがき」）。

（2）D.E. Hirsch, „Stilkritik und Literaranalyse im vierten Evangelium“, *ZNW*, 43, 1950/51, S. 129.

（3）W. A. Beardslee, “Recent Literary Criticism”, *The New Testament and its Modern Interpreters* (ed. E. J. Epp. & G. W. MacRae) (Philadelphia : Fortress Press, 1989), pp. 175-198. 取り分け pp. 175 f.

（4）H. Thyen, „Aus der Literatur zum Johannesevangelium“, *ThR*, N.F. 39/1, 1974, S. 49.

（5）R. Schnackenburg, „Entwicklung und Stand der johanneischen Forschung seit 1955“, *L'Évangile de Jean* (par M. de Jonge) (Leuven : Leuven University Press, 1977), S. 42 f.

（6）本稿で採用するような方法の理論的問題に関しては、筆者はかつてその一側面を少々立ち入って、とりわけP・リクールのいわゆる「テクスト理論」との関連の中で論じた。拙稿「ポール・リクールの『テクスト理論』とヨハネ福音書研究」『哲学』（北海道大学哲学会）第二十五号、一九八九年、一二七～一四七頁。

（7）このような「構造主義的」分析の典型的な例は、以下の著作などに見られる。D. Patte, *What is Structural Criticism?* (Philadelphia : Fortress Press, 1976). 山内一郎他

訳『構造主義的聖書釈義とは何か』ヨルダン社、一九八四年。および、前注(6)にあげた拙稿参照。なお、C・レヴィ＝ストロースの方法に関しては、C. Lévi-Strauss, *Anthropologie structurale* (Paris : Libraire Plon, 1958), pp. 227–255. 荒川幾男他訳『構造人類学』みすず書房、一九七二年、二二八～二五六頁を参照。また、A・J・グレマスの方法に関しては、A. J. Greimas, *Sémantique structurale ——recherche de méthode* (Paris : Larousse, 1966). 田島宏他訳『構造意味論——方法の探求』紀伊國屋書店、一九八八年を参照。

(8) 前掲拙稿参照。

(9) このことは、聖書に関する新しい意味での「文学批評」が拠って立つ基本的前提の一つとして共通認識を得ていると思われる。例えば、次の著作などを参照。S. D. Moore, *Literary Criticism and the Gospels : The Theoretical Challenge* (New Haven and Lodon : Yale University Press, 1989), xv–xvi. J. Kügler, *Der Jünger, den Jesus liebte : literarische, theologische und historische Untersuchungen zu einer Schlüsselgestalt johanneischer Theologie und Geschichite ; mit einer Exkurs über Brotrede in Joh 6* (Stuttgart : Verlag Katholisches Bibelwerk, 1988), S. 18–44.

(10) R. Schnackenburg, *op. cit.*, S. 42. ( ) 内はシュナックンブルク、〔 〕内は筆者による補い。

(11) これを新しい「文学批評」的観点から言い換えると、「文学作品の意味は著者の意図と一致する」といういわゆる "intentional fallacy" への批判として位置づけられる。本文で述べたテクストの「統一体」としての把握と並んで、このような考え方こそが新しい「文学批評」の重要な論点でもある。S. D. Moore, *op. cit.*, pp. 12, 54. などを参照。

(12) 例えば、次のような文法書などを参照。J. H. Moulton, *A Grammar of New Testament Greek*, Vol. III : Syntax (N. Turner) (Edinburgh : T. & T. Clark, 1963) pp. 3 ff., 50 and 189 ff. F. Blass/A. Debrunner (F. Rehkopf), *Grammatik des neutestamentlichen Griechish* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1984[16]), § 278, § 291, usw.

(13) このような観点からの説明としては、一人称 ἐγώ に関しては、例えば、J. Becker, *Das Evangelium nach Johannes* (Ökumenischer Taschenbuchkommentar zum Neuen Testament 4/1) (Würzburg : Echter-Verlag, 1979), S. 207–210. などを参照。三人称 (ἐκεῖνος, αὐτός, οὗτος) に関しては、R. Bultmann, *Das Evangelium des Johannes* (Meyers kritisch = exegetischer Kommentar über das

Neuen Testament) (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1968[19]), S. 29, Anm. 1. などを参照。

(14) 例えば、次の論文などを参照。É. Benvenist, «[Structure] en linguistique», «Structure des relations de personne dans le verbe» et «La nature des pronoms», *Problèmes de linguistique générale*, 1 (Paris : Gallimard, 1966), pp. 91–98, 225–236 et 251–257. 岸本通夫監訳「言語学における《構造》」、「動詞における人称関係の構造」、「代名詞の性質」、『一般言語学の諸問題』みすず書房、一九八三年、九九～一〇七頁、二〇三～二一六頁、二三四～二四一頁。

(15) 例えば、次の論文などを参照。P. Ricœur, «Qu'est-ce qu'un texte», *Du texte à l'action, Essais d'herméneutique*, II (Paris : Seuil, 1986), pp. 137–159. 前掲拙稿、一二七～一四七頁、さらに、本稿の本論Ⅲをも参照。

(16) これらの限定は恣意的である。ただし、これらの限定を行なう理由は、本稿で主題として取り上げる事態ができるだけ明確になるように、分析があまりに繁雑になるのを避けるためである。また「福音書」というジャンルの特殊性のゆえに、指示対象＝「イエス」への限定もある程度妥当性を持つと考える。例えば、言語学的に人称代名詞を考察するならば、指示対象が「イエス」である ἐγώ に対しては、σύ を用いて「イエス」がだれかを指示する場合を対称的なものとして考察すべきなのかもしれない [É. Benvenist, «La nature des pronoms», *op. cit.*, p. 253. 岸本通夫監訳、二三六頁、および、本稿の注(82)、(83)を参照]。しかし、とりあえず、ここでは、「イエス」がどの代名詞によって指示されるのかという観点をもって比較のメルクマールとする。いずれにせよ、これらの限定をはずして分析をさらに拡張しても、本稿の中心的主張（本稿の結論を参照）を補強しこそすれ、それによってその主張に反する知見を見出すことはないと思われる。

(17) 以下の数的データは次のコンコーダンス、および統計による。W. F. Moulton/A. S. Geden/H. K. Moulton, *A Concordance to the Greek Testament* (Edinburgh : T. & T. Clark, 1980[5]). *Computer——Konkordanz zur Novum Testamentum Graece* (Berlin, New York : de Gruyter, 1980). R. Morgenthaler, *Statistik des Neutestamentlichen Wortschatzes*, (und Beiheft zur 3. Auf.) (Zürich : Gotthelf Verlag, 1982[3]). ただし、最終的確認は次のテクストによる。Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece* (Stuttgart : Deutsche Bibelgesellschaft, 1987[26]). なお、括弧の中の数はヨハネのテクストを一とした場合の各福音書の相対的長さ、マタイ一・一九、マルコ〇・七三、ルカ一・二六 (R. Morgenthaler の統計を基にした

筆者自身による計算）に即して算出したものである（少数点以下四捨五入）。

(18) E. Schweizer, *Ego Eimi, Die religionsgeschichtliche Herkunft und theologische Bedeutung der johanneischen Bildreden, zugleich ein Beitrag zur Quellenfrage des vierten Evangeliums* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1965²). 取り分け Teil 1 を参照。

(19) E. Ruckstuhl, "Johannine Language and Style, The Question of Their Unity" *L'Évangile de Jean*, p. 125.

(20) E. Schweizer, *op. cit.* W. Nicol, *The Semeia in the Fourth Gospel, Tradition and Redaction* (Leiden : E. J. Brill, 1972).

(21) この点に関しては、マルコがヨハネとほぼ同じ割合を示すことが目を引く。また、このマルコの傾向は以下の本文で見るように、*ἐγώ* の斜格形全般について言えることである。ただし、マルコにおいては使用の絶対数そのものは少ない点に注意する必要がある。

(22) 例えば以下の箇所を参照。F. Blass/ A. Debrunner (F. Rehkopf), *op. cit.*, § 279, 1. J. H. Moulton, *op. cit.*, p. 38.

(23) *ἡμεῖς* の共観福音書テクストにおける使用数は、マタイ十八（十五）、マルコ八（十一）、ルカ十九（十五）。それらが「イエス」を指示対象とする場合の数と割合は、マタイ十五、八十三%、マルコ六、七十五%、ルカ十二、六十三%。*ἐμοί* の共観福音書テクストにおける使用数は、マタイ七（六）、マルコ二（三）、ルカ六（五）。それらが「イエス」を指示対象とする場合の数と割合は、マタイ三、四十三%、マルコ一、五十%、ルカ三、五十%。*ἐμέ* の共観福音書テクストにおける使用数は、マタイ九（八）、マルコ五（七）、ルカ九（七）。それらが「イエス」を指示対象とする場合の数と割合は、マタイ八、八十九%、マルコ五、百%、ルカ七、八十九%。

(24) *μοῦ* 系列の変化形に関する本文の記述と、*ἐμοῦ* 系列の変化形に関する前注の記述とを比較検討してみるとこのことが理解できる。

(25) 各福音書テクストにおけるそれらの数は、マタイ五（四）、マルコ三（四）、ルカ五（四）、ヨハネ十八である。だが、やはり、ヨハネ福音書テクストには、共観福音書に見られない一人称代名詞複数主格の特殊な使用例が存在する。つまり、指示対象が判然としないヨハネ第一章一六節の *ἡμεῖς* や、同じく第四章二二節、第八章四一節、第一七章一一節、二二節などにおいて *ἡμεῖς* =「われわれ」の中にイエス自身が含まれている場合、すなわち「イエス」が「われわれ」と発言する場合などがそのような例である。このような一人称代名

詞複数主格の特徴は、一見些細に見えるが、二人称代名詞の複数形同様、言語学的にも重要な問題を孕んでおり、稿をあらためての議論が必要であろう。このような人称代名詞の問題に関しては次の論文などを参照。É. Benvenist, «La nature des pronoms», *op. cit.*, pp. 251–257. 岸本通夫監訳「代名詞の性質」『一般言語学の諸問題』。もっとも、ヨハネ福音書テクストにおけるこの一人称代名詞の複数形の釈義上の問題については、例えば、以下の論文などですでに論じられている。A. v. Harnack, „Das ‚Wir' in den johanneischen Schriften", *Kleine Schriften zur alten Kirche*, Band II (Berliner Akademieschriften, 1908–1930) (Leipzig : Zentral antiquariat der demokratischen Republik, 1980), S. 626–643.

(26) *αὐ* の斜格の使用状況は以下のとおりである。属格 *αὐῶν* の各福音書テクストにおける使用数は、マタイ百十四（九十六）、マルコ四十（五十一）、ルカ百十四（九十）、ヨハネ三十五。それらの指示対象が「イエス」である場合の数と割合は、マタイ二十、十八%、マルコ十一、二十八%、ルカ二十、十八%、ヨハネ五、十四%、与格 *αὐοῖς* の各福音書テクストにおける使用数は、マタイ四十七（三十九）、マルコ二十（二十七）、ルカ四十八（三十八）、ヨハネ二十九。それらの指示対象が「イエス」である場合の数と割合は、マタイ十四、三十%、マルコ九、四十五%、ルカ九、十九%、ヨハネ三、十%、対格 *αὐέ* の各福音書テクストにおける使用数は、マタイ二十九（二十四）、マルコ十九（二十六）、ルカ三十七（二十九）、ヨハネ二十九。それらの指示対象が「イエス」である場合の数と割合は、マタイ十、三十四%、マルコ七、三十七%、ルカ十一、三十%、ヨハネ十一、三十八%。

(27) 二人称複数主格に関しては、一人称複数主格の使用上の問題とともに、それらのヨハネ福音書テクストにおける独特の意味作用について別途検討する必要があるであろう。というのも、それらの使用上の問題は、従来言われているヨハネの「教団」との関わりが推測されるからである。この点については、注の（25）も参照。

(28) この点に関しては、次の箇所などを参照。F. Blass/A. Debrunner (F. Rehkopf), *op. cit.*, § 277. J. H. Moulton, *op. cit.*, pp. 37 f.

(29) この点に関しては、次の箇所などを参照。F. Blass/A. Debrunner (F. Rehkopf), *op. cit.*, § 277. J. H. Moulton, *op. cit.*, pp. 40 f.

(30) そもそも *αὐτός* の女性・中性諸変化形の使用数は男性諸変化形に比べてかなり少ない。それらはまた、ある種の記事（例えば、女性主格 *αὐτή* であれば、ヨハネ福音書テクストにおいては、「ラザロの復活」や「空虚な墓」などの記事）

に偏在している。複数形に関しては、それらの使用数は比較的多いが、差し当たり各福音書テクストに顕著な使用上の特徴は見られない。

(31) これらのうち、その指示対象が「イエス」であるものおよびその割合は、マタイ十二、五十%、マルコ十五、四十七%、ルカ二十九、六十三%、ヨハネ十一、六十一%である。

(32) F. Blass/A. Debrunner (F. Rehkopf), *op. cit.*, § 277, 3. J. H. Moulton, *op. cit.*, p. 40.

(33) それらの箇所は、第二章二四節の他、以下のとおりである。第二章二五節、第四章二節、一二節、四四節、五三節、第五章二〇節、第六章六節、一五節、第七章四節、一〇節、第九章二一節（二箇所）、第一二章二四節、四九節、第一六章二七節、第一八章一節。これは *αὐτός* の全使用数の八十九%である。さらにこのことは、*αὐτός* の複数主格 *αὐτοί* についても言える。この特徴は、従来あまり注目されていないようである。N. Turner なども、斜格の過剰さなどについては論じている。J. H. Moulton, *op. cit.*, Vol. IV : Style (N. Turner) (Edinburgh: T. & T. Clark, 1976), p. 72. しかし、本稿で取り上げたような主格の特徴には、彼も言及していない。従来の文法的観点からは、*αὐτός* の斜格の多用は、「セム語的」であると歴史的に説明される。しかし、そうすると、ヨハネ福音書テクストにおける *αὐτός* の「強意代名詞」としての使用というこの特徴の歴史的・文法的観点からの説明は困難になる。なぜなら、この用法はどちらかと言えば古典的だからである。この点については、さらに、次の箇所も参照。F. Blass/A. Debrunner (F. Rehkopf), *op. cit.*, § 277_3. J. H. Moulton, *op. cit.*, Vol. III : Syntax (N. Turner), p. 194.

(34) 属格 *αὐτοῦ* の各々の福音書テクストにおける使用数、およびそれらの指示対象が「イエス」である場合の数と割合は、マタイ二百六十三（二百二十一）、百、三十八%、マルコ百七十三（二百三十七）、百六、六十一%、ルカ二百五十四（二百二）、百五、四十一%、ヨハネ百七十三、百五、六十一%。与格 *αὐτῷ* の各福音書テクストにおける使用数、およびそれらの指示対象が「イエス」である場合の数と割合は、マタイ百七十一（百四十四）、百三、六十%、マルコ百二十（百六十四）、七十一、五十九%、ルカ百五十三（百二十一）、六十七、四十四%、ヨハネ百七十三、九十一、五十三%。対格 *αὐτόν* の各々の福音書テクストにおける使用数、およびそれらの指示対象が「イエス」である場合の数と割合は、マタイ百二十五（百五）、七十八、六十三%、マルコ百七十八（二百四十四）、百十九、六十七%、ルカ二百十一（百六十七）、百二十四、五十八%、ヨハネ百七十六、百十七、六十六%。

(35) J. H. Moulton, *op. cit.*, Vol. III: Syntax (N. Turner),

p. 192.

(36) ヨハネ福音書テクストにおける ἐκεῖνος の多用については、F. Blass/A. Debrunner (F. Rehkopf), *op. cit.*, § 291. や J. H. Moulton, *op. cit.*, Vol. III : Syntax (N. Turner), p. 45, 192. などを参照。

(37) その数は、マタイの場合、対格一。マルコの場合、対格二。ルカの場合、主格二（ただし、この二例は κἀκεῖνος である）、対格二。それに対してヨハネの場合は、主格四十（それら以外の付加的用法の二例はいずれも第二一章にあることに注意が必要である）、属格三、対格三。

(38) ἐκεῖνος の実詞的使用は、いわゆるヨハネ福音書のプロローグ（第一章一節～一八節）において早くも、そして目立って見られる。したがって、従来、様々に論じられているように、プロローグの「資料」的性格を考慮するならば、この特徴はヨハネ福音書テクストの「生成」上の問題と結びつけられる可能性もある。

(39) F. Blass/A. Debrunner (F. Rehkopf), *op. cit.*, § 291, 6. J. H. Moulton, *op. cit.*, Vol. III : Syntax (N. Turner), p. 45. 例えば、E. Schweizer, *op. cit.*, S. 90 f. などを参照。E・ルックシュトゥール、W・ニコルなどもこれを踏襲している。E. Ruckstuhl, *Die literarische Einheit des Johannesevangeliums, Der gegenwärtige Stand der einschlägigen Forschungen* (Studia Friburgensia, N. F. 3) (Freiburg : Paulus, 1951/Göttingen : Vandenhoek & Ruprecht, 1988), S. 194. W. Nicol, *op. cit.*, p. 17.

(40) J. H. Moulton, *op. cit.*, Vol. III : Syntax (N. Turner), p. 45.

(41) J. H. Moulton, *op. cit.*, Vol. IV : Style (N. Turner), pp. 72 f.

(42) E. Schweizer, *op. cit.*, S. 90 f. E. Ruckstuhl, *op. cit.*, S. 204, 208 usw. W. Nicol, *op. cit.*, p. 17. などの箇所を参照。

(43) R. Bultmann, *op. cit.*, S. 29, Anm. 1. これに対するルックシュトゥールの批判も参照。E. Ruckstuhl, *op. cit.*, S. 62.

(44) 例えば、E. Haenchen, *Das Johannesevangelium* (Tübingen : J. C. B. Mohr, 1980), S. 67 では、E. C. Colwell, *The Greek of the Fourth Gospel. A Study of its Aramaism in the Light of Hellenistic Greek* (Chicago : University of Chicago Press, 1931) の知見を基に、ἐκεῖνος の実詞的使用法が「ヨハネテクストによって非常に頻繁に用いられている」ので、この特徴は「専ら新約聖書に、あるいはほとんどヨハネだけに現われている」(E. Schweizer, *op. cit.*, S. 87) ものであるという主張が否定されている。しか

し、たとえE・ヘンヒェンの指摘するとおりであるとしても、この ἐκεῖνος の使用法が依然としてヨハネ福音書テクストの特徴である事実には変わりない。本稿で行なおうとしているような新しい「文学批評」は、ヨハネ福音書テクストと他のコイネーギリシア語の文書を比較するのであるならば、単にそれらの個々の語や文体を比較するのではなく、「諸々の代名詞使用そのものの特徴」といういわばある種の文学的「構造」を比較する必要性があることを示そうとするのである。なお、この点に関しては、本稿の「おわりに」をも参照。

(45) 本稿の注（37）を参照。

(46) F. Blass/A. Debrunner (F. Rehkopf), *op. cit.*, § 277, 3.

(47) したがって、限定的用法も加えた οὗτος の使用数全体に対する実詞的用法の割合は、マタイ六十九%、マルコ六十七%、ルカ六十五%、ヨハネ六十七%と、ヨハネが特に大きな値を示しているわけではない。

(48) ただしまた、これらの数の οὗτος の実詞的用法に対する比率を見ると、マタイ四十七%、マルコ五十%、ルカ三十六%、ヨハネ五十一%と、ルカの値の低さが目を引くが（恐らく、これはルカにおける αὐτός の多用によって説明できるであろうが）、前注の比率同様際立った差異が見られない。

(49) οὗτος の斜格のそれぞれの福音書テクストにおける使用数は以下のとおりである（属格、与格、対格の順）。マタイ、四（三）、七（六）、四（三）。マルコ、二（三）、四（五）、三（四）。ルカ、七（六）、十二（十）、十一（九）。ヨハネ、十九、十三、十三。このうち実詞的使用法であるものの数は、マタイ、〇、三（三）、一（一）。マルコ、〇、二（三）、〇。ルカ、〇、四（三）、七（六）。ヨハネ、六、九、七。これらの οὗτος の斜格形のうちその指示対象が「イエス」であるものは、属格 τούτου では〇、与格 τούτῳ ではヨハネ一、対格 τοῦτον ではルカ二（二）、ヨハネ四である。その他、男性複数諸変化形、女性単数、および複数の諸変化形に関しては四つの福音書テクストの間に際立った差異は見られないことを明記しておく。

(50) 本稿で取り上げた αὐτός, ἐκεῖνος, οὗτος の男性単数諸変化形の合計数は、マタイ、六百三十五（五百三十四）、マルコ、五百十一（七百）、ルカ、七百四十五（五百九十二）、ヨハネ六百八十六である。

(51) しかし、αὐτός, ἐκεῖνος, οὗτος の男性単数主格すべての使用数（すなわち限定的用法も加えた数）に対するこの数の割合は、それぞれ、マタイ六十九%、マルコ九十四%、ルカ八十二%、ヨハネ七十七%である。

(52) しかし、αὐτός, ἐκεῖνος, οὗτος の男性単数主格の実詞的使用数に対するこの数の割合は、それぞれ、マタイ五十%、マルコ五十二%、ルカ五十五%、ヨハネ四十五%と、各福音書

間に大差はない。

(53) ただし、主格の多用がまさに重要なのである。というのも、主格に関しては、斜格における「セミティズム」のような歴史的説明が不可能だからである。

(54) 本稿で取り上げた各人称代名詞（ないしは、人称代名詞として機能する指示代名詞や αὐτός）の単数変化（三人称の場合は男性）形の数を合わせた使用数は、マタイ千五十四（八百八十六）、マルコ七百七（九百六十八）、ルカ千百八十四（九百四十）、ヨハネ千三百七。

(55) さらに、本稿では詳述しないが、ヨハネ福音書テクストでは、複数主格形の使用数についても特徴がある。本稿の注の(25)、(27)も参照。

(56) 本稿の「序」を参照。

(57) E. Schweizer, *op. cit.*, S. 5–9. などを参照。

(58) ここで言う「テクストの事実」とは、例えば、F・カーモードが言うところの "What is written about" に対置されたものとしての "What is written" などに近い概念である。S. D. Moore, *op. cit.*, p. 123.

(59) Bultmann, *op. cit.*, S. 78 usw. が A. Faure, „Die alttestamentlichen Zitate im 4. Evangelium und die Quellenscheidungshypothese", *ZNW* 21 (1922), S. 99–121 の説を取り上げて論じて以来、さまざまなかたちで「しるし資料」の存在を提唱する研究者は多い。本稿で論じるR・T・フォートナを除くと、以下の論究などが重要である。W. Nicol, *op. cit.* R. Schnackenburg, *Das Johannesevangelium* (Freiburg·Basel·Wien : Herder 1981[5]), 1. Teil, S. 36–40. J. Becker, „Wunder und Christologie", *NTS* 16 (1969/70), pp. 130–148. ders., *Das Evangelium nach Johannes* (Gütersloh : Gerd Mohn, 1985[2]), S. 112–120.

(60) ここで主に対象とするのは、次の二著作である。R. T. Fortna, *The Gospel of Signs* (Cambridge : Cambridge University Press, 1970), *The Fourth Gospel and its Predecessor* (Philadelphia : Fortress Press, 1988).

(61) もっとも、ここでの目的はフォートナの説を批判することであって、テクストの背後にいかなる「伝承」・「資料」も存在しないと主張することではない。この点に関する筆者の考えは、H. P. Heekerens, *Die Zeichenquelle der johanneischen Redaktion, Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichite des vierten Evageliums* (Stuttgart : Verlag Katholisches Bibelwerk, 1984), S. 27 f. の「第四福音書において記述された資料 (Material) が用いられ手を加えられているのだとしても、もはやそれは十分な確実さを持って〔現在のテクストから〕解き離されはしない」という主張に最も近い（〔 〕内は筆者による補い）。

(62) 代名詞のようなテクストの瑣末な要素の文体分析上、および釈義上の重要さについては、本稿の「序」を参照。

(63) フォートナが再構成した「しるしの福音書」は *The Gospel of Signs* と *The Fourth Gospel and its Predecessor* とではかなり異なっている。とりわけ後者においては、資料の部分を現在のヨハネ福音書テクストから「容易に分離できない」(*The Fourth Gospel and its Predecessor*, pp. 109 etc.) などとして、ヨハネ第四章四節〜四二節をそれから除いている。それによって、両著作における「しるしの福音書」の代名詞使用状況にも若干の数的変動が見られる。しかし、そのことは本稿の議論の大勢には影響を与えない。ここでは、ことがらを鮮明にするために、最初の著作において提示された「しるしの福音書」を分析対象とする。そもそも新著において第四章四節〜四二節を彼の「しるしの福音書」から除く理由は、それほど説得力のあるものとは思われない。むしろ、このような改訂こそ、逐語的な文書資料再構成作業の恣意性を露呈するものであると言えるのではないか。なお、フォートナよりは遙かに曖昧なかたちではあるが、ベッカーなどは第四章四節〜四二節をも「しるし資料」(Semeia-quelle) に帰している (Becker, Das Evangelium nach Johannes, S. 115)。

(64) この図における各代名詞の数は、フォートナの再構成した「しるしの福音書」(R. T. Fortna, *The Gspel of Signs*, p. 235-245.) に見出される代名詞の数を現在のヨハネ福音書との比率（四・七倍）によって相対的に調整した数である。

(65) R. T. Fortna, *The Gspel of Signs*, p. 115.

(66) この点に関する限り、共観福音書テクスト間の類似が非常に顕著であることに注目する必要がある。

(67) これは共観福音書テクストの標準には合っている。つまり、それらにおいては三人称主格代名詞としての機能を持つ οὗτος の使用法は一般的である。しかしこれとて例えばヨハネ福音書テクストの οὗτός ἐστιν... などの代名詞＋繋辞表現の多用というテクストのもう一つの「文学批評」上の特徴をも考慮にいれて説明されるべきであろう。

(68) ヨハネ第四章二五節、第一八章一七節、二五節。

(69) ここで仮定しているような説明の試みは、フォートナ自身によって行なわれているものである。R. T. Fortna, *The Fourth Gospel and its Predecessor*, p. 210, n. 509. さらに、例えば ἐκεῖνος に関しては、それを取るに足りない特徴として考え、「資料」抽出上のメルクマークとして重視しない (idem, *The Gspel of Signs*, p. 210)。しかし、ἐκεῖνος をそのように考えることに対する反論は、E. Ruckshthul "Johannine Language and Style, The Question of Their Unity", *L'Évangile de Jean* (par M. de Jonge), p. 133

を参照。また、本稿はルックシュトゥールの反論を、ヨハネ福音書テクストの代名詞を中心とした文学的構造の分析という側面から補強することになるであろう。

(70) R. T. Fortna, *The Fourth Gospel and its Predecessor*, pp. 205 ff. ましてや、ヨハネ福音書テクストの「資料」を「第四の共観福音書」などと考えるライムの試み (G. Reim, *Studien zum alttestamentlichen Hintergrund des Johannesevangeliums*, Cambridge : Cambridge University Press, 1974) などは、本稿において分析を試みたような「文学批評」的観点を無視したものと言わざるをえない。

(71) R. T. Fortna, *The Fourth Gospel and its Predecessor*, p. 205.

(72) 筆者はすでに、このような観点からヨハネ福音書テクストにおける繋辞使用と接続詞 ὅτι の使用について分析を行なった。拙稿「ヨハネ福音書における繋辞の機能とその思想—第八章一二～五九節をめぐって—」『基督教学』(北海道基督教学会編) 第二一号、一九八六年、一～二九頁。「ヨハネ福音書における ὅτι の問題」『宗教研究』(日本宗教学会編) 第二七七号、一九八八年、一七五～二〇一頁。

(73) R. T. Fortna, *The Fourth Gospel and its Predecessor* はまさにそのようなことを目指した著作である。

(74) フォートナは、彼の再構成する「しるしの福音書」は紀元四十年代から五十年代に記述され、おおよそQと同時代であり、マルコよりもさらに古い最初の福音書である、とまで推測を進める。R. T. Fortna, *The Fourth Gospel and its Predecessor*, p. 216.

(75) C. H. Dodd, *Historical Tradition in the Fourth Gospel* (Cambridge : Cambridge University Press, 1963).

(76) ある種の合理主義的思考に立脚した従来の「文学批評」は、現代における様々な文学批評理論、言語哲学などの進展を見るかぎり現在では再考の必要があるだろう。この点に関しては、W. A. Beardslee, "Recent Literary Criticism", *The New Testament and its Modern Interpreters* (ed. E. J. Epp & G. W. MacRae) p. 176. などを参照。J. Wellhausen や E. Schwartz によって始められ、今日までヨハネ福音書に対する旧来の「文学批評」の基礎となっている方法とは、テクストの「緊張、断絶、論理の欠如、編集的結合、重複、矛盾、不一致、思考の進展を妨げる付加、異なる神学的立場」(U. Schnelle, *Antidoketische Christologie im Johannesevangelium, Eine Untersuchung zur Stellung des vierten Evangeliums in der johanneischen Schule*, Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1987, S. 15) などに注目して分析を進めるものである。しかし、新しい「文学批評」においては、上記のような分析上のメルク

マールは必ずしも第一のものではない。この点に関しては、本稿の序の注（9）で取り上げたS・D・ムーアの著作なども参照。

(77) この点は、E・ルックシュトゥールやU・シュネレなどによってもつとに指摘されている。E. Ruckstuhl, "Johannine Language and Style", *L'Évangile de Jean* (par M. de Jonge) pp. 130 f. U. Schnelle, *op. cit.*, S. 173.

(78) この語はO. Jespersen, *Language ; Its Nature, Development, and Origin* (New York, 1923), pp. 123-124 において用いられ、R. Jakobson. "Shifters, verbal categories, and the Russian verb", *Selected Writings*, II, *Word and Language* (The Hague : Mouton, 1971), p. 130-147. 川本茂雄監修、田村すゞ子他訳「転換詞と動詞範疇とロシア語動詞」『一般言語学』みすず書房、一九七三年、一四九～一七〇頁などにおいて詳述されている。

(79) この語については次の著作などを参照。野本和幸『フレーゲの言語哲学』勁草書房、一九八六年、取り分け第七章。厳密に言えば指示代名詞は「指標詞」とは呼ばれていない。ただし、本稿で扱っている指示代名詞は、その実質的機能が人称代名詞と等しいものなので、両者の区別をここでは無視してかまわないと思われる。また、強意代名詞 αὐτός についてもこの点は同様である。

(80) R. Jakobson, *op. cit.*, p. 133. 川本茂雄監修、田村すゞ子他訳、一五二頁。

(81) 野本和幸著、前掲書三六二頁。

(82) R. Jakobson, *op. cit.*, p. 133. 川本茂雄監修、田村すゞ子他訳、一五二頁。次注（83）も参照。

(83) これは、É・バンヴェニストが言うところの「・二人称代名詞に特徴的な、「話の現存（l'instance de discours）への…指向」と呼ばれるものであろう。É. Benvenist, «La nature des pronoms», *op. cit.*, pp. 252 f. 岸本通夫監訳、二三五～二三六頁。

(84) その際、この「私」は前注で述べた「話の現存」を反映しないことになる。ここでの「私」は、むしろバンヴェニストが言うところの三（非）人称的機能を持った代名詞と言えるであろう。É. Benvenist, *op. cit.*, p. 256. 岸本通夫監訳、二四〇頁。

(85) 注意を喚起したいのは、ここでは、記述されている事柄や記述内容の史的・現実的真偽を問題としているのではないということである。ここでの探求は、あくまで純粋な文学的・機能的側面を論じているだけである。しかし、まさにこの点が、本稿で提起する新しい「文学批評」の一つの顕著な方法的側面でもある。

(86) 実際には、このような論究、すなわちヨハネ福音書テクス

トの「イエス」から史的イエスを復元しようとするような試みは、現在では少なくなっている。しかし、例えば、いわゆる「ヨハネ教団」に関してなどは、テクストの「われわれ」を直接それに結びつけて考えるような、文字どおり短絡した視点が依然として残っている。この点に関しては、次の著作におけるまとめが役に立つ。U. Schnelle, *op. cit.*, S. 53-59.

(87) 歴史的・批判的観点からした場合、このような結論はむしろ自明なことかもしれない。すなわち、長大な告別説教にしろ *ἐγὼ εἰμι*... 表現にしろ、それらがどこまでイエス自身の言葉に遡れるかについては疑問が多い。しかし、本文で述べたような文学的機能がテクストの意味世界、言語世界においてどのような意味を持つかを解釈し、しかる後に始めて、さらにそのテクストの言語世界が歴史とどのように関わって行くのかを探求することは、従来の歴史的・批判的方法による研究とはまた別の問題である。本文中の「イエス」とイエスの書き分けはこのことを示唆する。例えば、本稿の注(25)であげたハルナックの論文では、イエス自身などの歴史的実体の用いる「われわれ」と、テクストに記述されている(福音書記者によって用いられる)「われわれ」の間に、本稿で論及しているような人称代名詞の言語学上の機能的差異を何ら認めることなく、それらをまったく同列に論じているように見える。あるいは、意図的にそれらの本質的差異に言及していないように見える。これなどやはり、ある種の「歴史」中心主義が本稿で試みたような「文学批評」的探求を疎外している例ではないだろうか。A. v. Harnack, *op. cit.*

(88) IIの分析の項で明らかなように、共観福音書テクストに比した場合のヨハネ福音書テクストにおける全人称に渡る代名詞使用の数的特徴は、この点で示唆的である。つまり、各人称の代名詞の連動した機能があるのではないかと予想できるからである。本文中に掲げた図なども参照。

(89) ヨハネ福音書テクストにおいてこの「捩れた直接性」、「偽装された直接性」を示すのは何も人称代名詞のみではない。例えば、接続詞 *ὅτι* の多用やそれと密接に結びついた実質的直接話法の多用などにもその機能があると考えられる。拙稿「ヨハネ福音書における *ὅτι* の問題」参照。恐らく、このような代名詞の特殊な働きが、リクールが言うところのテクスト化よる「指示の変質」であろう。この点については、以下の論文などを参照。P. Ricoeur, «La fonction herméneutique de la distanciation», *Du texte à l'action*, p. 113. 久米博訳「疎隔の解釈学的機能」『解釈の革新』白水社、一九七八年、一九一頁。拙稿「ポール・リクールの『テクスト理論』とヨハネ福音書研究」。

(90) 例えば、ヨハネ福音書の「境界言語(Grenzsprache)」(T.

Onuki, *Gemeinde und Welt im Johannesevangelium, ein Beitrag zur Frage nach theologischen und pragmatischen Funktion des johanneischen »Dualismus«*, Düsseldorf : Neukirchener Verlag, 1984, S. 26 ff. usw.) と呼ばれているものを「テクストの事実」に即して、より具体的に探求して行くことが可能になるであろう。

(91) 福音書における語や文体の統計的処理に関して、例えばG・リヒターは、「第四福音書の文学的単一性」を主張するにはそれが不適切であるとしている。G. Richter, *Studien zum Johannesevangelium*, (hg. v. J. Hainz, BU 13) (Regensburg : F. Pustet, 1977), S. 71. その際の主な論点は、「それ（語の統計による証拠）は、その都度の場所における個々の語の内容を把握することができないから」ということである。確かに、統計的数字自体は何も語らないとしても、それに対する解釈は、「その都度の場所における個々の語」のテクストにおける「機能」については何事かを語りうる。上記のリヒターのような考え方の背後にある思考を穿鑿するならば、それは、テクストから抽象された神学的命題のみが、演繹的に「その都度の場所における個々の語の内容」を決定しうる、という前提であろう。しかし、テクストを解釈するうえで、その「内容」と「機能」の截然とした分離が不可能であること、またむしろテクストの意味がそれら両者の相互作用によって形成されることなどは、福音書に関する最近の新しい「文学批評」が指摘している重要な問題点である。この点については以下の著作を参照。S. D. Moore, *op. cit.*, pp. 64 ff.

(92) 初期キリスト教団における独特な概念語彙のみならず、言語の「統辞（Syntax）」構造の分析の重要性についてはH・C・キーがつとに指摘している。H. C. Kee, *Miracle in the Early Christian World, A Study in Sociohistorical Method* (New Haven and London : Yale University Press, 1983), p. 56. なお、筆者はそのような具体的探求として、従来ヨハネ福音書のギリシア語に非常に似ているとされてきたエピクテトス（アリアノス）の文体との比較検討を計画中である。

(93) 例えば、歴史的・批判的方法の残滓は拭い切れていないが、J・D・クロッサンは譬の「イエス自身による構造（ipsissima structura）」の再構築を試みている。J. D. Crossan, *Cliffs of Fall : Paradox and Polyvalence in the Parables of Jesus* (New York : Seabury Press, 1980). とりわけその第二論文を参照。ただし、これに対するH・C・キーによる批判や、新しい「文学批評」的観点からの批判については次の著作を参照。S. D. Moore, *op. cit.*, pp. 143 ff.